コロナ禍の学生ＯＢら支援

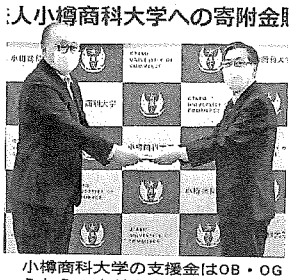
筑波大 全学生に支援金給付
関西大 新入生の交流サイト

新型コロナウイルスの影響を被っている大学生に対し、大学やOB、保護者らが支援体制を拡充している。学費や生活費を援助したり、大学が閉鎖中でも友達づくりができるようにしたりし、コロナ収束後はスムーズに通常のキャンパスライフに移行できる態勢を整える。

すべての学生を対象に経済的な支援を実施したのが筑波大学だ。およそ1万人の学群生（学部生に相当）全員に1万5000円、学生宿舎やアパートなど実家から離れて住む場合はさらに上乗せして計3万円の「支援金」を給付した。支援金は返還する必要がなく、困窮する学生にとって貴重な資金だ。

筑波大は一人暮らしの学生の割合が約8割と全国的にみても高い。金保安則副学長は「経済的に困っている学生は多い。調査すると時間がかかるので一律でやることにした」と話す。学生への支援額は総額で6億4000万円。基金などで4億円を確保し、不足分は教職員や卒業生らからの寄付金で対応する。

インターネットで小口の資金を不特定多数の人から募る「クラウドファンディング」も活用。サッカー選手の中山雅史さんらOB・OGも応援メッセージを寄せ、卒業生を中心に1000人以上が応じた。寄付金はこれまでに計1億7000万円集まり、不足分は着々と埋まりつつある。



小樽商科大学の支援金はOB・OGらからの寄付金を原資とした（6月の贈呈式）

小樽商科大学は新型コロナウイルスの影響で経済的に困窮している学生に3万円を支給した。全学生の1割強にあたる299人が申請した。

原資は大学のOB・OGが組織する「緑丘会」が集めた支援金だ。伝統的に緑丘会の結束力は強く、メンバーには大手企業幹部も多い。後輩のピンチに多くのOBが支援に名乗りを上げ、1500万円を用意した。

大学側も「スピード重視の対応が必要」（江頭進副学長）と5月末に支援を決定した後、1カ月程度で学生への給付を完了した。前期授業料の納付期限も1カ月程度遅らせるなど、困窮する学生に配慮した。

新型コロナが収束する兆しはみえず、学生のバイト収入や保護者の世帯収入が一段と減少するおそれもある。江頭副学長は「後期授業の開始を見据えて「追加支援もやりたい」と話す。後期は対面授業も再開するが、ベースは遠隔授業が続く。今後は遠隔授業に必要な通信費の補助などを検討したいという。

コロナ禍は経済面だけでなく、大学生活の様々な場面に及ぶ。特に新入生は入学早々からキャンパスが閉鎖され、友人づくりに苦労するケースも少なくない。

関西大学に通う学生の保護者組織、教育後援会は「触れずにフレンズ」と題し、友達づくりを支援する交流サイトを7月に開設した。対象は2020年度の新入生約7000人。関大生限定のオンライン掲示板で、出身地や学部、興味のあることなどカテゴリーごとに自由に書き込みできる。必要に応じ、先輩や大学職員も参加する。

開始から2カ月弱で新入生の半数程度が利用しているという。スポーツや音楽、アニメなどの話題で「初対面」同士が盛り上がり、実際に会う約束をするといった動きもみられる。

関西大は2年前から一人暮らしを始める新入生を主な対象とした交流会「新入生歓迎の集い」を1000人規模で開催するなどしてきたが、今年は新型コロナで開催を見送った。「慣れない土地で一人暮らしを始めた子どもが心配」といった声が保護者から寄せられ、教育後援会主導でサイトを立ち上げた。

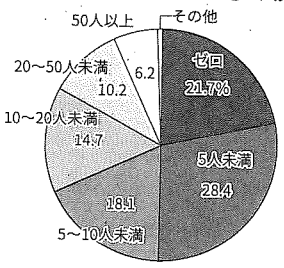
今秋以降はSNS（交流サイト）のように個人が自己紹介のためのマイページを設けたり、グループで会話できたりする機能を追加することも検討。コロナ禍でも学生同士が交流を深められるよう工夫を凝らす。

（松田拓也、浅沼直樹、久貝翔子）

バイトできない 27%
新しい友達ゼロ 22%

大学生活に様々な支障

コロナ禍が長期化し、大学生活にもさまざまな支障が出ている。全国大学生協連が7月下旬に実施したアンケート調査によると、アルバイトについて「やりたいが、まだ一度もできていない」と答えたのは回答者全体の27%、「新たなバイト先が見つからない」が8%だった。



（注）調査結果を基に日本経済新聞が計算
（出所）全国大学生協連　2020年7月調べ

このほか、31%がコロナ流行以前に比べてバイト収入が減ったと回答した。飲食店や小売店などの休業や営業短縮、人員削減の影響で、バイト需要が減っているのが影響したとみられる。

大学でできた新しい友達も回答者の22%がゼロと答えた。最も多かった回答が「5人未満」の28%、5人以上10人未満も18%と、大学の活動が制約されるなかで友達づくりに苦戦しているのがうかがえる。

立命館大学新聞の調査で退学を視野に入れている学生が1割近くにのぼるなど、コロナで大学生活の継続を断念するケースが増える可能性もある。日本や世界の未来を支える若者の学びをいかに守るか、大人たちの知恵が問われている。

ご意見・情報は電子メール、nikkei048@nex2.nikkei.co.jpへお寄せください。